

研究紹介

日本文学研究専攻 教授 落合博志

日本中世の文学と芸能、日本古典籍の書誌学の研究をしています。

ここでは、今年発表した二つの論文について紹介します。

善通寺蔵『三国真言伝法師資相承血脈』について一紹介と考察

(『寺院文献資料学の新展開 第五巻 中四国諸寺院I』2020年3月臨川書店)



香川県善通寺市の総本山善通寺に蔵される真言宗の血脈を紹介し、その性格を考察しました。前半は広沢流血脈に小野流の一派である安祥寺流の血脈を接合したもの、後半は安祥寺流を中心とする小野流血脈で、前半の安祥寺流血脈は伝法灌頂血脈、後半の安祥寺流血脈は秘密灌頂血脈であることを指摘し、このような血脈が作られた背景に安祥寺流独特の付法形式があることを述べました。そして記載される僧名から、鎌倉時代末期正和2～3年(1313～14)頃に京都の安祥寺で成立した血脈と推定しました。

また、南北朝時代に安祥寺で編まれた私撰集『安撰和歌集』の作者と考えられる僧が多く見えることを指摘し、『安撰和歌集』の作者考定に有用であることを示しました。

能楽研究における文献学の問題

(日本文学協会『日本文学』2020年7月、
特集・文献学をとらえ直す)



日本古典文学において「文献学」は、現存する写本・版本を比較校合して作者の原文を復元する研究を指しますが、能の本文資料である誦本は作者の原本から転写を繰り返して成立したのではなく、従って能については、諸本を校合して原作の形に遡るといった通常の文献学的方法は適用できないことを指摘しました。

誦本は異なる本文を持つ各時代・各流派のものが伝存しており、能が伝えられて行く間に本文がさまざまに改変されたことが想像されるため、その特性を踏まえ、原形から遠ざかることをマイナスに評価するのではなく、改変された本文に意味を見出すことも重要であると述べました。そして能や狂言などの芸能、物語・軍記など、伝承される間に本文が変化するのがある種の文学ジャンルの性格であり、原形を追求する文献学と別に、本文の動きを総体的に捉える学問が構想される必要があることを論じました。